

地がある。さらに鷺見から半明にかけて数ヶ所があり幅100m、高さ50mほどの大きな崩落地が存在する。

また、中河内～椿坂峠にかけては、1989年4月30日にも崩落状況を中心に調査したが、栃ノ木峠のやや南から中河内の集落に至るまで、雪崩跡と思われる高さ約20～30mの崩落地が延々続いている。特に中間付近の谷筋では大規模な崩落がみられた。中河内～椿坂峠にも、雪崩によると思われる崩落が多く（4ヶ所）、最大規模のものは幅約80m×高さ約70mあった。

中河内より東側の高時川本流部分でも、崩壊が数多くみられ、半明から東に約1kmの地点では、崩落により道路が通行止めとなっていた。このほかにも5ヶ所、大きいものでは幅50m、高さ20mほどの崩落がみられた。また、崩落跡が復旧途上にあると思われるものが1ヶ所（幅20m、高さ40m）あり、半明から東100m～200mほどの北斜面面は、雪崩跡と思われる崩落状況を呈していた。

〈奥川並川沿いの地域〉

戸田から現在は廃村となっている奥川並川集落にいたる間に、水没予定地内に崩落2ヶ所があり、幅50m、高さ30m程度、さらに道路の対岸の奥まったところの山に、上部から中腹にかけて巨大な崩落跡がみられる。

さらに上流の足の又、中津谷、リッカ谷部分でも幅30m、高さ30mほどの小規模なものから、幅80m、高さ50mほどの中規模なものまで、6ヶ所の崩落もしくは伐採跡がみられた。

〈尾羽梨川沿いの地域〉

この流域では8ヶ所の崩落地または伐採跡地とみられる箇所がある。

特に尾羽梨ダム下の2ヶ所は大きく、水平方向の幅100m、斜面に沿った長さ約100mにわたって、樹木がなく草地となっている箇所がある。

〈針川沿いを地域〉

少なくとも3ヶ所の崩落もしくは伐採跡地がみられ、その規模はほぼ幅50m、高さ30mほどの中規模のものであった。

3. 高時川中流下流の天井川状態をみると、上流の山地の崩壊の激しさが推測できる。
4. 植生（種類・分布・変せんなど）については、国の「評価書」はくわしくのべている。しかしこれをダムとの関連で、みていないから、なんのこともよくわからない。

溪谷の下部は、ミズナラ、サワシバ、イヌシデなど、少し上でケヤキ、コナラ、上部はブナを主にしている。

奥川並川筋は杉の植林が多い。全国的に昭和30年代頃から、自然林をきって、針葉樹の経済林に変えてきたが、ここでも杉の大きさからみて、そうである。谷の上部は自然林である。他の谷も自然林である。この理由については、国は調委していない。常識的にいうと、斜面が急なので植林に向かない。植えると20年前後で崩落しやすい。

広葉樹の方はもろい岩盤の中へよく根が入りこみ、自然のネット状でよく押さえている。

蛇行はげしいここにダム湖をつくり、道路をつくるために自然林を切ると、総延長は長いので、崩落箇所も多くなり、堆砂、濁りは加速する。その対策にセメント構造物を法面につける、と国はいうが、巨大ダムでは成功は不明である。さらに背水端よりも上流にもセメントをつけることは不可能である。（参考例、四国仁淀川）

5. 「高時川山地は樹木におぼれているので、降雨による濁水の流入は他のダムに比べて大きくない」と国はいうが、ちゃんと調査していたら、こんなことはいえない。

たとえば四国那賀川の場合、源流域は見事な広葉樹林で、カエデ類が多い。中流は杉の植林域である。しかし、ある時の台風以後、各谷からのダム湖への濁水の流入はものすごい。手取川もそうだし、他にも実例は多い。

なお、降雨による濁水の流入は、濁水発生の一部でしかない。ということは先にみた。

#### 四、ダム湖に淡水赤潮・アオコの発生の危険性について

1. 水質が悪化したら「曝気循環装置」をつけるといい、万一赤潮発生なら「噴水装置」をつけると国はいうが、両方とも湖内へ酸素を入れるものだろうが、一方が水質悪化に有効で、もう一つが赤潮に有効だという根拠の説明がない。だから疑問である。

ダムによっては、同じ場所に「噴水」と「曝気」を同じ場所にすえているところもある。どっちがどうなのか、疑問がある。なお他のダムでもそれは完全でないといい、かつ多数すえつけなければならぬ、と困っている。

2. 琵琶湖で赤潮が発生したとき、流入のリン対策をすれば赤潮は防げると大宣伝をし、洗剤云々といつて日本中から報道をあつめるという大喧騒を、当時の知事武村氏がひきおこし、名声を博した。私たちは、それは間違っているといつても武村氏は耳をかきなかった。洗剤などの責任にしておく

と、開発土木工事は良いことになるからである。結果、赤潮はおさまらず、私たちの心配したアオコ（毒性、ミクロキスティス、アナベナ）まで、発生してしまった。

丹生ダムでも国は同じ水準の考え方ではないのか。赤潮・アオコ発生のプロセスの説明はされていない。大きな疑問である。

3. 「類似ダムからみて赤潮発生の可能性は低い」と国はいうが、そのダム名を上げていないから、ゴマカシとみられても仕方ない。

類似ダム（規模地形の）でも赤潮は発生している事実を私たちは多く知っている。（参考例、福井九頭竜ダム）

昭和62年～平成3年の5年間に赤潮の発生したダムは81ヵ所と報告、種はペリディニウム他、（国土庁「水資源白書5年度」）これからみても国の発表に矛盾がある。なお実際はもっと多い。プランクトン種は発表以外にも私たちは調査しているので、多いことが証明されていよう。

4. 丹生ダムの赤潮・アオコ発生の要因（琵琶湖の項で詳述）

支流奥川並川には杉植林が多い。腐植土が多い。広葉樹林よりも杉林はリンで10倍、チッソで1.5多く林床にでてくる。（『森そのしくみとはたらき、只木良也』共立出版）

この林地が水没し、かつ分水嶺からも10倍多いリンなどが補給されつづける。ところでダム湖には酸素が極端に少なく、補給も少ない。するとリンが水中に溶けやすい。さらに自然界にある鉄・マンガンを溶けだす。

一方、広葉樹林・杉林からの落葉が日々ダム湖に入る。これは酸素の少ないダム湖では分解しに

く。ことに杉の葉は一層むつかしい。すると、赤潮・アオコ増殖の直接の働きになる物質（フルボ酸・フミン酸）が発生する。これらが関連し合ってキレート効果といわれる働きになり、赤潮・アオコ増殖になると、わかってきた。

つまりこのダムはつくってはいけないことになる。

5. さらに上流に、中河内集落があって、耕地22ha。圃場整備（用排水分離）をしている。用排水分離は従来の施肥のリン・チッソが田圃の中に順次に落ちて行く構造なので、一枚一枚の田からリン・チッソが排水路に直接入って、高時川に流入する率が高い。

又、農村下水道を今後つくることになっているが、これは、BOD20PPM、チッソ20PPMと、きわめて不完全である。この家庭下水もダムがないなら、川の諸生物の取りこみと漏過で浄化されていくが、ダムができると不完全処理のまま湖内にたまっていく。ダム湖では酸素が極端に少ないので分解力

(kg/ha・年)

区	元	林	チッソ	リン	カリウム	カルシウム	マグネシウム
1. 伊藤 (畑)	スギ林	落葉枝	48.5	13.6	10.0	102.1	
		林内雨	22.4	7.5	59.7	70.3	
		計	70.9	21.3	69.7	172.4	
	ブナ・ダマツ林	落葉枝	51.1	8.4	14.9	30.4	
		林内雨	10.9	0.2	26.2	16.1	
		計	62.0	8.6	41.1	46.5	
モリシマアケシヤ林	落葉枝	91.5	8.5	12.4	35.6		
	林内雨	21.8	1.6	75.3	40.4		
	計	113.3	10.1	87.7	76.0		
2. 京都 (上伏茂)	広葉樹林	落葉枝	40.2	1.8	34.6	41.5	5.9
		林内雨+樹幹流	8.5	0.2	32.6	15.8	5.1
		計	48.7	2.0	67.2	57.4	12.0
	ヒノキ林	落葉枝	14.3	0.9	5.7	35.2	3.6
		林内雨+樹幹流	7.9	微量	11.2	16.0	3.5
		計	22.2	0.9	16.9	51.2	7.1
3. 番貝 (扇生)	アカマツ林	落葉枝	33.9	2.80	7.0	33.8	3.7
		林内雨+樹幹流	4.7	1.14	21.8	27.6	6.2
		計	38.6	3.94	28.8	61.4	9.9

1. 伊藤ら 1964. 2. 善坪ら 1969. 3. 西村 1973

「森そのしくみとはたらき」 只木良也 他、共立出版

が落ちて、じょじょにダム湖の水質は悪くなっていく。

これらが複合してダム湖の汚染はすすむ。これらについては、当然、国は調査し、予測を発表すべきなのに、それをしない国の責任は大きい。

#### 五、濁水による農業被害について

1. スキー場濁水騒ぎの時、濁水が田に入っては収穫量に影響するので、高時川からの取水口の高時川頭首工を締めて、本流へ全水量を流している。これは一時的だから、それで事はすんだがダムができて、長期間濁水がつづくとうちはいかない。国は短期間の濁水というが、それが10~20日間であらうと、田植の時なら大問題である。国はこれについて調査し、かつ農業者と話し合っていないのではないか。

2. 頭首工からの取水量は11.4t/sである。4月16日~9月15日。平常、これだけ取水すると高時川は水量少なく下流の漁業者は困っている。この取水量をめぐっては農業者と漁業者間でトラブルがある。かつて取水堰は個々にとり、かつ構造がちがっていて、両者が共存していた。灌漑面積は3,967ha。

3. ところで、ダムからの放流水量と時期が決っていない。それも濁水の時もある。国は放流の時期について決めていない。疑問である。

4. その上、ダムにためられた水は前述したように、水質は悪化している。その上、水量の少ない時に、ダム直下の集落からのBOD20PPM、チッソ20PPMがくわわると、高時川の汚染は激しい。さらに田圃からの肥料・農薬の流出もあり、これらが高時

川頭首工から取水されるわけだ。

ダムがなければこれらの問題はさしてない。なお、ダムからの放流方法と水量については疑問がある。これは後でみる。

5. なお、農業の排水が集中して、田川と丁野木川を経て、湖に入り、湖に影響を与えていることは、別途の問題として、話し合い解決をつけないとまらない。たとえば苗代かきの濁水の問題もある。頭首工で取水を集中し、さらに用排水分離がない時には、こんな問題はなかった。

この複雑な状況の折に、ダムは一層問題をこじらせる要因になる。国はどう責任をとるのか。

#### 例、兵庫県下の農家の平均的な肥料の使用量

1 ha 当り

チッソ160kg リン96kg カリ98kg

(但し、少なく使う田もある。また出植の時期に集中的に施肥する場合と、追加していく場合もある)

中河内他の排水処理施設の水質

項目	箇所	流入水	処理水
BOD	mg/l	200	20
COD	"	100	20
SS	"	200	50
T-N	"	43	20
T-P	"	6	1

#### 六、ダム放流水と河床低下

1. 『評価書』では、ダム地点で現在低水流量が3.6 t/sを、ダム後は4.6tになるから下流の水質には問題はない、というが、1 t/s増える根拠の説明がない。

2. すこし、下流の関西電力の取水で（その間に細流からの増水がある）5.56t プラス維持用水1.8tが流れるとはいえない、と『見解』でいっている。関電水利権は犯すことはできないので、1.8tの方が消えることになる。つまり関電取水口から放流点までの間は水がなくなることにもなりかねない。この1、2の關係に疑問がある。

3. たとえば、1 t増えたとすると、ダムに砂はたまって、水のみ流れて、1 t増えるのだから、ダム直下から菅並・上下丹生・関電放流口までの河床低下はより激しくなる。

姉川本流に予定の姉川ダムは850万tだが、それでも150万tの堆砂見込みで、河床低下は1年6mmという。国発表だから少ない目であろう。それでも6mmなら10年で6cmにもなる。これでは川の漁その他に影響がでる。高時川ではどうか、発表されていない。

さらに、ダムからの放流量は台風・豪雨又は渇水用放流、逆に水ためで、激しく上下する、この時、高時川の河床低下はどうなるのか。疑問が大きい。恐ろしいことがかくされているのではないか。

#### 七、害虫発生と粉塵舞い上がりなどの被害

1. ダム直下の水流が少なくなったり、そこへ肥料と下水が流れると、川藻が大量発生したり、害虫も

発生する。これは各地ででている。(参考例、那賀川)

2. ダム背水端のすぐ上流は、洪水の上下で、堆砂がむき出しになり、それが風で舞い上がる。家中にまで入る。多く実例がある。国は何故発表しないのか。(参考例、天竜川)

#### 八、高時川床が低下する事で水道取水は大丈夫か

1. 高月町の水道水源は地下水である。恐らく高時川の伏流水が関係しているであろう。

湖北町の水道水源は半ば高時川、半ば余呉川の伏流水である。

びわ町の水道水源は、従来は姉川本流の伏流水だが、高時川の伏流水もとることになっている。

先にみたように、丹生ダムの堆砂によって、高時川の河床低下はさけられない。ということは水道水源の伏流水の低下が心配される。又、ダム湖に貯溜中には、上記の上に、高時川の水量が落ちて、伏流水が一層低下しないか。

2. さらに、ダム湖に臭気のあるプランクトンが増殖した場合、ダム下流で、水道・井戸取水に臭気がついて、困ることになるのではないか。(参考例、猪名川)

国はこれらについて、各自治体と話し合っていない。疑問が多い。

#### 九、関電揚水式ダムからの濁水との複合被害

高時川の支流の杉野川に揚水式下部ダムをつくるが、2千万lの中規模ダムである。岐阜の上部ダムとの関係で濁水が発生する可能性がある。貯水量以外

の降雨はダム湖内を通過して下流へ当然流出する。この濁水が高時川と合流したら、その責任は、国か関電か、どちらか、ということになりかねない。それが不明である。

#### D. 琵琶湖の決定的な破壊

##### 一、丹生ダムの影響の特徴

すでに、丹生ダムから河川・農地におけるダムの影響について問題点や疑義を指摘した。ここでは、それが琵琶湖に与える影響について触れる。

丹生ダムは次のような特徴をもつので、他のダム以上に琵琶湖に大きな影響を与える要素を持っている。

1. 丹生ダムは琵琶湖の集水域にある青土ダム(700万l)、栗栖(芹川)ダム(1,000万l)、北川(安曇川)ダム(900万l)など計画中のダムも含めて、それぞれの十数倍に及ぶ大型のダムである。
2. 前述のように崩壊地帯に作られるので、水質を悪化させる要因が強い。
3. ダムの水がきわめて閉鎖性の強い琵琶湖に注ぎ込まれる。つまり、琵琶湖周辺以外のダムの水は普通海水に流入するが、丹生ダムの場合は淡水である琵琶湖に流入する。

##### 二、濁水による漁業への影響

高時川ダムの水はダムサイトから下流約25kmで姉川本流に合流する。すでに述べたように丹生ダムから濁水が長期にわたってここに流れることが予想される。

姉川は前述のようにアユの産卵場所として重要な価値をもっている。姉川で産卵場となる場所はほぼ河口から上流の0.5kmから3.0kmのところである。この場所は高時川からの流入をもろに受ける場所である。ここの河床堆積物は砂礫が全体の約35%、礫が

約30%、砂地が約28%となっている。ここでの腐植質土砂は1%にも満たない。丹生ダム建設後、濁水が長期にわたって流れて来ると、当然、濁水で河床は次第に多量のシルトや泥がここを覆い、底質に大きな変化が起こって、アユの産卵場としての価値は失われる。姉川における産卵場の損失は琵琶湖全体のアユ(自然アユ)の資源に大きな打撃を与える。

また、アユの河川における漁獲量も姉川は全河川のアユ漁獲量の14—21%を占める(昭和53年—58年調査による)、ビワマスの漁獲量も15—32%(昭和53年—58年の調査による)であるので、濁水が継続的に発生すれば、魚の濁水に対する忌避行動によってアユ・ビワマスの遡上は少なくなる。(これらの魚は濁水を忌避する)。また、遡上する個体があったとしても、シルトなどがアユの餌となる珪藻などを覆うため餌不足で魚の成長は阻害される。

姉川におけるアユの産卵場所としての役割から考えて、この産卵場所の影響は琵琶湖のアユ全体にも決定的な影響を与える。それはアユは一年魚であるから、一旦数を減らすとその影響は大きいからである。従って、姉川における影響はここだけにとどまらず、琵琶湖全域に及ぶ。現在、姉川と安曇川付近に人工河川が作られている。ここでは養殖アユを放流産卵させてアユの資源を維持しようとしている。しかし、人工河川の中での養殖アユによる資源の維持には限界がある。例えば、琵琶湖産アユがこの養殖アユの占める数が多くなって、病気に罹りやすくなったり、あまり知られていない魚病の多発やアユの行動の変化を起こしたりしかねない。

濁水が琵琶湖に注ぎ込まれると湖面だけでなく、濁水成分が夏の水深50m付近の水溫躍層のところでも水塊をなして、北湖全域に広がる可能性が強い。か

つて木の浜の埋立工事中に浚渫余剰濁水が1日排出水量10万t(1秒につき1.2tに相当)が沈殿しないまま竹生島まで広がり、漁獲に影響を与えた。丹生ダムからの平常の流量(洪水期には毎秒最大330tの放流)でも、大量の汚濁水が塊状になって流れることになり、北湖一带にこの濁水の影響が拡大する可能性がある。この時には漁網などに粘液物が付着して漁獲に影響を与える可能性がある。

### 三、ダムが琵琶湖の水質に及ぼす影響

丹生ダムの場合はすでに述べたように赤潮発生やアオコの発生(相模湖など淡水赤潮の発生の後、アオコの発生を見たダムもある)の可能性は大きい。高時川の現在の水質から判断するとすでに赤潮発生の条件が備わっている。全窒素で年平均0.15—0.2PPM全リンで年平均0.005—0.01PPMで赤潮の発生が起こっている(例えば永瀬ダム)が、高時川の水質は現在でも全窒素・全リンの年平均がそれぞれ0.23PPM付近、0.014PPM付近である。さらに、カルシウム濃度も赤潮発生に関係すると言われているが、高時川は9PPM前後で淡水赤潮発生に必要な濃度(3—7PPM)を満たしている。さらに、単なる窒素やリンの濃度だけでなく、先の述べた丹生ダムの特質(崩落地、多量の腐植物質の供給、酸欠で水底からの植物プランクトン増殖促進物質の溶出)からその可能性は高い。

また、たとえ、ダム湖で赤潮やアオコの発生がなくても、この水が琵琶湖に流入すると、琵琶湖で赤潮やアオコの発生をもたらす可能性がある。その理由はダム湖水に含まれる植物プランクトン増殖物質やダム湖で発生した植物プランクトンの「種」などが常に琵琶湖に供給されることになるからである。

他のダム湖では河川を通った後は海水に注ぎ込まれるが、丹生ダムからの水は再び閉鎖性の強い琵琶湖で、しかも淡水にそそぎ込まれる。同じ淡水の植物プランクトンの「種」が琵琶湖に注ぎ込まれると、条件さえ整えば植物プランクトンが大増殖する可能性が大きい。

特にダム湖からの濁水が長期的に流入すると、ダム湖水に含まれる植物プランクトン増殖物質などが常に琵琶湖に供給されることになる。つまり、これは植物プランクトンの培養液を琵琶湖にそそぎ込むようなものである。琵琶湖への影響は濁水の問題だけでなく、植物プランクトンの増殖という形で琵琶湖の水質に大きな影響を与えることになる。

近隣にある余呉湖ではミクロキスティスによるアオコが57年、58年に発生しいまでもその発生が続いているが、当時の水質は年平均全窒素で0.47—0.59PPM、全リンは0.02—0.03PPMであった。

北湖でも長浜・彦根等沿岸帯はこれに近い水質であり、ここに高時川ダムからの植物プランクトン増殖促進物質が流入すればアオコの発生が起こりやすくなる。局所的にみれば姉川からの流量が少ない時には高時ダムからの水は河口付近に滞留しやすくなり、それだけその周辺の水質を悪化させる可能性が大きい。

さらにもっと深刻なことは、琵琶湖の状態がこのまま進めば、前述のように将来20年後には北湖も急速に水質が悪化することが予想される。丹生ダムのような大型ダム湖からの大量の水の供給はこの傾向をさらに促進することになる。

#### 1. イサザへの影響

最近激減したイサザはかつては漁獲高第3位を占めていた。イサザは夏から秋にかけて昼間は40

—50m（時には90m）の湖底付近で生活しているが、夜になると表層部に移動する（一日の間に温度の低い湖底付近から温度の高い表層部に移動する）。この性質は繁殖行動に重要な意味をもつ。この垂直移動に伴う1日の水温差は夏で20度であるが、秋には水温差が10度になる。水温差が小さくなると性巣の発達が促進され繁殖が可能になる。

ダムの水の影響で、琵琶湖で植物プランクトンが大発生すると湖底に植物プランクトンの死骸がたまりやすくなり、湖底の酸素の減少を促進する。イサザは湖底の酸素が少なくなるだけで生息深度が変わり、1日の垂直移動の幅が少なくなる。イサザの上下の垂直移動の幅が少なくなると生息環境における水温差が夏でも少なくなり、イサザの産卵時期に変化が起こることが予想される。今まではイサザの産卵期がヨシノボリの産卵期と重ならないようにしたり、ヨシノボリの産卵場をめぐる競い合いやヨシノボリからの補食を避けていた。産卵時期が変わるとこのような共存の維持が壊され、イサザの種族維持を困難にする。やがて、このような影響のために琵琶湖特産のイサザは絶滅の危機に瀕する可能性がある。

## 2. 水生生物への影響

琵琶湖にアオコが発生しやすくなると、中には水鳥、魚を死亡させる植物プランクトン（アナベナ・フロサクアエ）などが大発生することもありえる。アナベナ・フロサクアエは神経毒性をもち、アメリカやアフリカなどの湖ではその毒性のため大量の魚が死亡している。この他、アフアニゾメノン・フロサクアエという植物プランクトンは魚を殺すだけでなく、まひ性貝毒性を持っている。その毒性物質が貝に蓄積すると、それを

食べた人は食中毒をおこし、呼吸が不規則になり、痙攣を起こした後に呼吸不全で死亡することもある。そのためこの植物プランクトンが発生したところでとれた貝類は食べれなくなる。こうして魚の大量死や貝の毒化により、漁業者に大きな打撃を与える。

毒性植物プランクトンだけでなく、植物プランクトンの増加は湖における生態系にさまざまな変化をもたらし与える影響は大きい。たとえば、透明度の低下は水浄化・漁業生産の上でも重要な沈水植物の減少を招くなどである。

## 3. 飲み水への影響

淡水赤潮やアオコの原因となるプランクトンの中には飲み水にも影響を与えるものがある。全国的にアオコの原因プランクトンとしてよく知られているミクロキスティス・エルギノサは肝臓毒性があり、変異原性（染色体異常）、胎児致死、生殖腺毒性のあることも知られている。飲み水の影響で、肝臓障害を起こした例もある。（オーストラリア）。また、内毒素をもつ植物プランクトンによって胃腸障害を起こした例もある（北アメリカペンシルベニアで約5,000名の人が胃腸障害）。アナベナ・フロサクアエ、オッシラトリア・ブレビス、オッシラトリア・テヌイなどもこの内毒性をもつといわれている。アオコの原因になるこれら藍藻類がもつ内毒素は通常の浄化施設では十分に除去できないということである。

## 4. 農業に与える影響について

大雪ダム、鏡ダム、綾北ダムなどで発見されているパンドリナ・モルムというプランクトンは植物の成長を抑制する物質をだすので、農業用水として利用できなくなると言われている。丹生ダム



でもこの種の植物プランクトンが発生しないという理由はないのでこの水を利用する農業用水に影響が出ることもあり得る。

以上述べたように丹生ダムの影響は琵琶湖にもさまざまな悪影響をもたらす可能性がある。琵琶湖の現状で述べたように予想が出来ないほど琵琶湖は不安定である。今までのような分析的な手法だけで環境の評価を行ったり、影響を予測することは出来ないほど現在の琵琶湖の状態は悪化しやすい。

今日一刻も早く琵琶湖の水環境の改善に力を入れなければならない時に、これに逆行するようなダム（しかも大型の）の建設は大きな問題を残す。しかも、一旦悪化した湖をもとにもどすことは如何に困難であるかということはずでに経験済みのことである。もし、ダムの建設によって以上述べた悪影響が琵琶湖にもたらされたとしたらその責任は極めて重大である。私たちがここで提起した疑問点や問題点について誠実に答える義務が開発側にあると考える。

## E. 提 言

私たちは公共土木工業を否定してはいない。むしろ国土の保全と、破壊されたところの復元に金をかけるべきである。しかし、生態系の破壊・人々を不幸にする工事は絶対にやってはならない。そのためには、徹底的な調査と、関係住民の意見に耳をかたむけることを怠ってはならない。

生態系の保全と、壊れた生態系の復元の公共事業は、当然地域地域へのきめこまかい手厚いものになり、多額の国家予算を必要とするので、内需拡大と、中小の建設業・企業への援助となり、地域地域での雇用をふやすことになる。

ところが、丹生ダム建設はこれらと逆行する。みてきたように山地と高時川・姉川と琵琶湖の生態系と住民の生活はどうなるのかについては、ほとんど調査をしていない。水害対策一つみても矛盾だらけである。逆に手厚い方法がありながら、ダム建設に集中している。つまり一部の大ゼネコンの利益本位とみられても仕方ない内容である。水需要も同じ。

昨今、親水性・多自然・近自然とかをうたってのミニチュア的誤った土木工事がクローズアップしていて、これが眩惑になり、丹生ダムのような巨大破壊が進行している。琵琶湖という一千四百万人の生命源へ、ほぼ年中濁水が流れこむことを考えただけでも、背すじが寒くなる。必らずわが国最大の破壊・汚染になる。

そして一度この大ダムをつくってしまうと、姑息な対策をたてても、どうしようもない。

国は、この恐しい土木事業を即刻やめるべきである。治水・利水その他の目的が真に必要ななら、一から調査をし直すべきである。50項目もの疑問点があるのだから

ら、まずそれを考えるべきである。そうすれば、地域の福祉と地域経済の活性化になる工事をみつけだすことができるだろう。経済界も、そのように国を指導してほしいものである。

正誤表		
(頁、行)	(誤)	(正)
19p 8	くると	て
24p 8	る。	た。
" 21	戸田	田戸
25p 4	を	の
" 21	調委	調査
27p 17	事際	実際
28p 11	なのでいので	だったのと違って

## 琵琶湖丹生ダム調査団

鈴木 紀雄 (滋賀大学)  
 中西 正己 (京都大学)  
 黄之瀬健志 (滋賀)  
 岡田 正俊 (〃)  
 森 直樹 (〃)  
 小野 次郎 (京都)  
 大田 修 (大阪)  
 富田 重行 (〃)  
 辻田 啓志 (〃)

高槻市富田町1-1-11  
 ☎0726-93-1925

「山河崩壊」8号 1994年2月発行  
 分担価格 400円 送料込 500円  
 賛同カンパで成立っているのでカンパのため。  
 発行責任 河川湖沼全国会議  
 高槻市富田町1-1-11 ☎0726-93-1925  
 郵便振替 大阪0-52081  
 河川湖沼と海を守る全国会議







